高津郷土史料集・第十五篇
平成五年（一九九三）三月

矢倉沢往還

二子・溝口宿の街並（その二）

川崎市立高津図書館

矢倉沢往還　二子・溝口宿の街並（その二）

玉川より大山道の冨士（上田武一氏画）

目次

はじめに……1
1 二子の渡しと亀屋……3
2 玉川の清流と砂利船……3
3 二子の亀屋……4
4 岡本かの子の生家……5
5 ヨシザキ商店……6
6 高津高等女学校……6
7 芭蕉の句碑……7
8 大山灯籠……7
9 溝ノ口郵便局……8
10 農工銀行……8
11 田中屋鈴木商店……9
12 稲毛乗合馬車……9
13 灰吹屋……10
14 川崎警察署高津分署……11
15 旧高津町役場……11
16 内藤慶雲石材店……13
17 濱田庄司の生家……13
18 溝口中宿商店街……15
19 村田茶園……15
20 池田屋染物店……16
21 嶋屋呉服店……16
22 玉川電車と電灯……17
23 高津薬局……18
24 溝口の亀屋……18
25 溝口神社祭礼之図……20
26 安井自転車……20
27 溝口神社の御遷宮……20
28 岡田屋足袋店……21
29 栄橋附近……21
30 根方堀の平瀬川樋……22
31 平瀬川の洪水……22
32 宗隆寺の御会式……22
33 片町の神奈川道……23
34 二子の渡し……24
35 大石橋……24
36 橋場米店……24
37 宗隆寺のお会式……25
38 溝口神社の祭礼……25
39 高津高等女学校……26
協力いただいた方々……26
編集後記……27

凡　例

一　本報告書は、『高津郷土史料集』の第十二篇以降実施してきた矢倉沢往還シリーズの第四回目にあたるもので、二子・溝口宿に関する記録である。

特に今回は、二子・溝口宿の史料のうち、古老の聞き取りを得て、現存はしていないが、その姿・形を後世に記録しておく必要性があるものを中心に、写真・絵図などを挿入しながら編集したものである。

二　調査は高津図書館からの依頼を受けて、編集委員（鈴木　穆・新井　清・角田益信・村田文夫）が高津図書館と協議しながら実施したものである。

三　本報告書で掲載した写真は、今回の企画にあわせて地元の関係者から提供されたものである。また、二子・溝口宿の絵図は上田武一氏が描かれたものである。これらの資料は、関係者のご了解を得て、本報告書に　掲載をさせて頂くことができた。

四　掲載順は、二子から溝口に向って順次配列しているが、一部編集上の都合で入れ替えている箇所がある。

五　解説文は、編集委員の四名が担当した。その内訳は、「はじめに」は村田が、上田武一・遠藤九兵衛氏など古老からの聞き取りは鈴木、新井、角田が行い文章化した。写真と絵図の解説については、編集委員四名が協議しながら文章化した。

六　目次中のゴシックは、上田武一氏が描かれた絵画を示す。

矢倉沢往還

二子・溝口宿の街並（その二）

はじめに

赤坂御門を起点にして多摩川を渡り、二子・溝口宿を経て馬絹・有馬・荏田・長津田などを通過し、矢倉沢の関所へ至る矢倉沢往還（大山道）の歴史と現状を写真・図面などを基にして探訪するこのシリーズも、今回で四回目を迎えた。

これまで三回に分けて連載してきたが、その内容は大きく二分できる。ひとつは『写真で読む、今昔・矢倉沢往還』その一・二（「高津郷土史料集」第十二・十三篇、高津図書館）のような、道筋の歴史と現風景を二十年の風雪を挟んで写真で定点撮影し、時の流れを順次素描していった企画と、前回の『矢倉沢往還、二子・溝口宿』（「高津郷土史料集」第十四篇、高津図書館）のように、調査の対象を宿（しゅく）の範囲に限定し、その歴史的・民俗的な事象を素描するものとの大別である。今回の企画は、基本的に後者の続編として位置づけられる。

では、もう少し具体的に今回の調査意図などを説明しよう。

実は、前回までの三回は、私たちが具体的に見聞した素材を記録してきた。つまり、対象となるものが現存していたり、あるいは現存していないものでも、過去において私たちの誰かが見聞していたものが対象であった。ところが今回は、既に現存していないことを前提で、ただその姿・形をできるだけ忠実に後世へ向け記録しておきたい、という主旨から企画したものである。そのためには、二子・溝口の往還に面した家々を訪ねて写真や絵図面類などが残されていないものか、先ずそれを探し求める作業から始めた。私たちの唐突な依頼にもかかわらず、多くの方々から貴重な資料提供を受けることができた。衷心より御礼申し上げる次第である。

しかし、それだけでは資料的に不十分であることも否めなかった。その時に話題にのぼったのが、溝口在住の古老・上田武一氏のことであった。同氏は今年で八十一才であるが、今も矍鑠（かくしゃく）としておられる。しかもたいへん絵の才能があり、特に蔦職であったことから、常に高い視点から宿の街並を俯瞰（ふかん）してこられたという独特の経歴の持ち主である。加えて、記憶力も抜群でおられる。ちなみに上田氏によって描かれた二子・溝口宿の絵図は、失われつつある宿の原風景を彷彿とさせてくれるには十分であった。この絵図は、同氏の御配慮で高津図書館に寄贈して頂いたので、そのうちの十二枚を今回使用させて頂くことにした。

さらに目的とした宿の原風景が復元できないか、ということで、上田氏以外にも、同じく古老の遠藤九兵衛氏からも昔話を聞き取ることにし、御本人と御家族の御了解を頂くことができた。

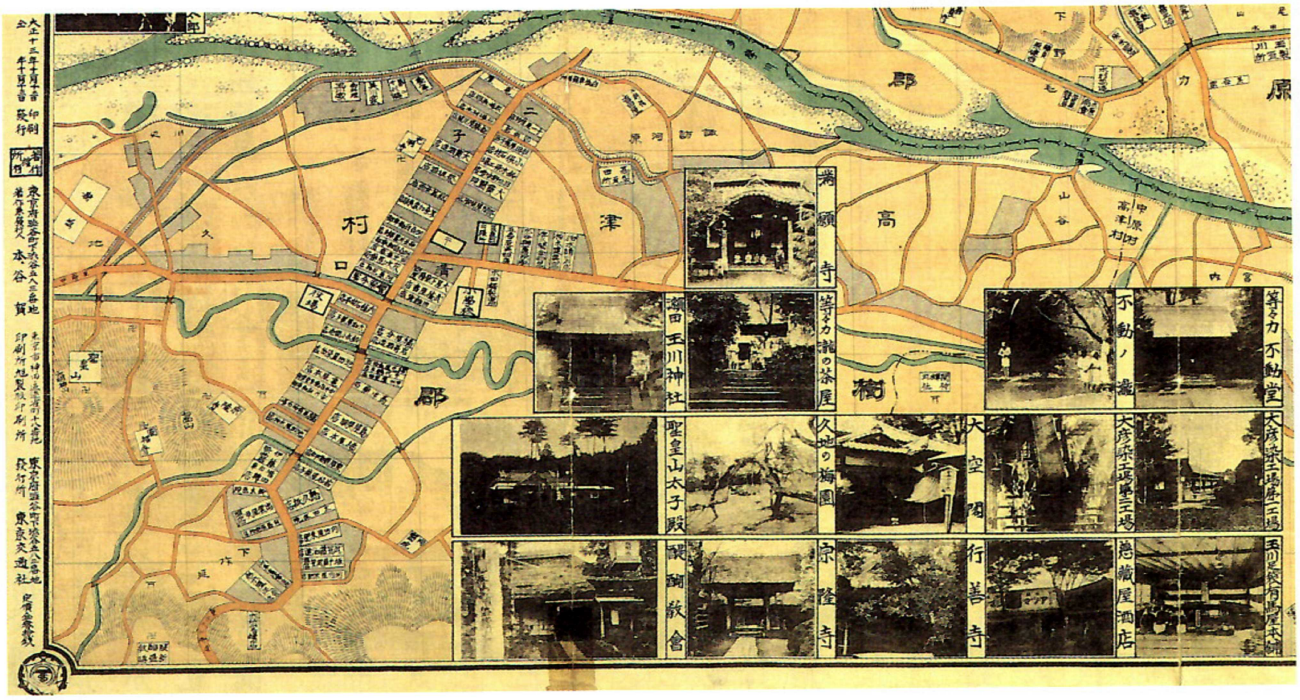
このように今回の記録は、これまでのように編集委員である私たちが、直接見聞したものを文章にしたものではない。主役は、過去の歴史を熱心に語ってくれた上田・遠藤両氏をはじめとする古老の方々であり、かつまた家宝のように大事に保管してきた写真や絵図

面を惜しげもなく提供してくださった方々であって、私たちはもっぱらそうした過去の記憶を聞き取り、資料として編集することにあったのである。

ところで、実際にこのような調査を体験してみての印象であるが一言でいえば、失われた街並景観を復元することがいかに難しいかをあらためて思い知らされたことである。

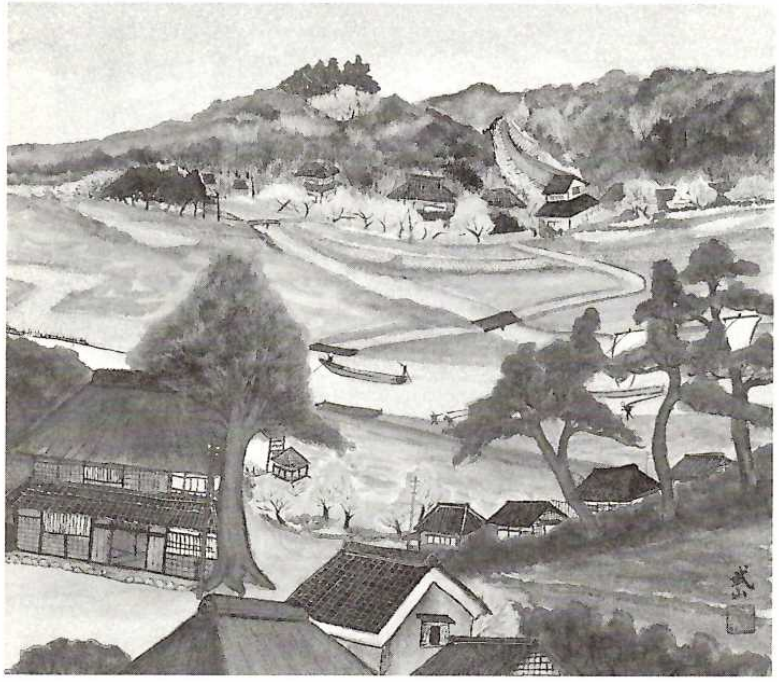
たしかに話者の方々は記憶力が優れておられるが、実際に聞き出したものを、いざ文章にしようとすると、オヤ、と一瞬戸惑う部分も正直なところあった。そこで編集委員の責任で若干の整理をして文章化させて頂いた点をご了解願いたい。しかし、いずれにしても「無形の記憶」というものは、徐々に喪失する運命にあり、そのためには「有形の記録」がいかに重要であるかが実感させられた。そして「有形の記録」を必要としている対象は、なにも明治・大正期の遠い過去のことに限る理由は全くないわけで、現在の平成の世を含めた昭和期の記録も無論対象とする必要がある。

ちなみに前回の報告書のなかで「ここ二、三年で取り壊された商家等、あるいは取り壊す計画のある商家等が気のせいか予想以上に多いことであった」「河内屋もタナカヤ呉服店（蔵部分）もその仲間で、いわば辛うじてセーフというところである」と記してきたが、その時記録した三十件の内約半数近くが、すでに姿を消してしまった。もしこのシリーズで「有形の記録」化がされていなかったら、はたして誰にこれらの老舗の雰囲気が語れようか。



大正13年発行大日本職業明細図の内高津村部分

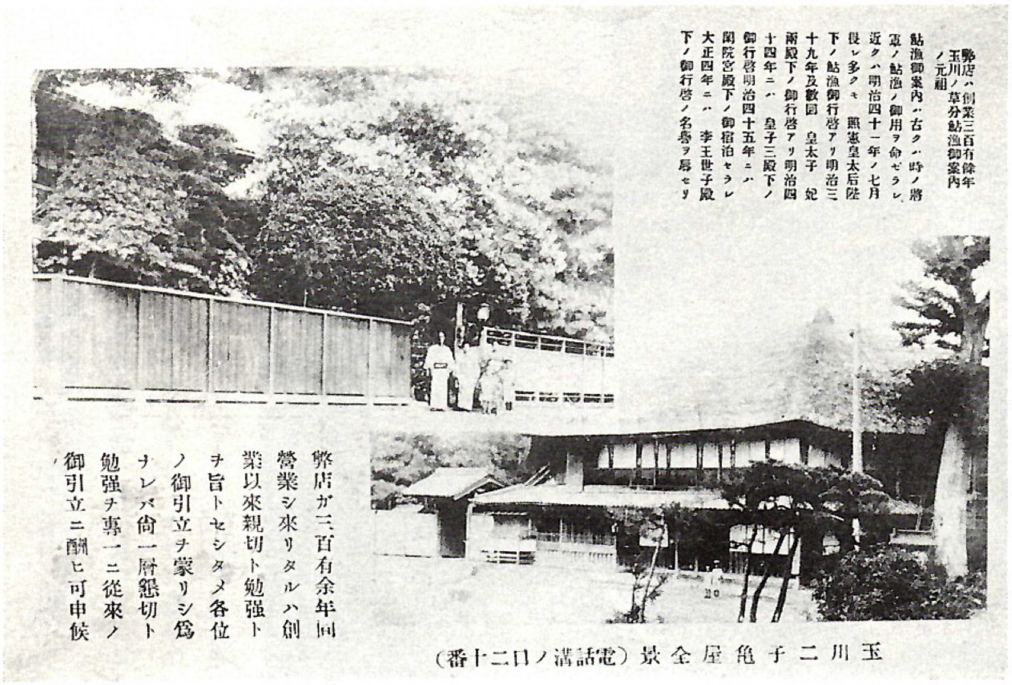
1　二子の渡しと亀屋（大正十年以前）



2　玉川の清流と砂利船

大正の頃までは、多摩川の砂利船が大きな帆を掛けて、二子から宿河原付近まで上ってきた。船は長さが十間、幅が一間半ぐらいあり、川の中から「洗い砂利」を掘って船に積み込み、帰りには帆を下ろしてくだった。砂利は東京、横浜方面へ持って行った。

3　二子の亀屋



玉川二子亀屋全景（電話溝ノ口二十番）

江戸を後にした大山道が多摩川の二子の渡し（今の二子橋）を渡ったところの旧堤防にあり、街道に面して建てられていた。

屋号は元「玉亀楼（ぎょくきろう）」と呼んでいたが、明治四十一年照憲皇太后陛下が鮎漁に行啓された折、「ここは亀屋か」とお尋ねになったので、以後「亀屋」と改めたという。玉亀楼と呼んでいた頃、名入りの食器を注文したところ、江ノ島の「金亀楼」のものと間違って届けられたという話が残っている。ここに掲載した絵ハガキに次の一文がある。

「弊店ハ創業三百有餘年玉川の・・・・・・・」とあり、創業は元禄十二年と伝えられ、昭和十二年に廃業するまで、多摩川の鮎漁と共に栄えてきた。

新館は明治の中頃、三年の歳月を費して建てられた。縁側の欄間（らんま）には当時未だ珍重されたギヤマン（色ガラス）をはめ込むなど贅沢な造りであったようである。

その後本館は昭和十三年に取壊した。新館は皇族がお泊りになった由緒深い建物という事で保存されていたが、終戦直後米軍のダンスホール建設のため取壊されてしまった。

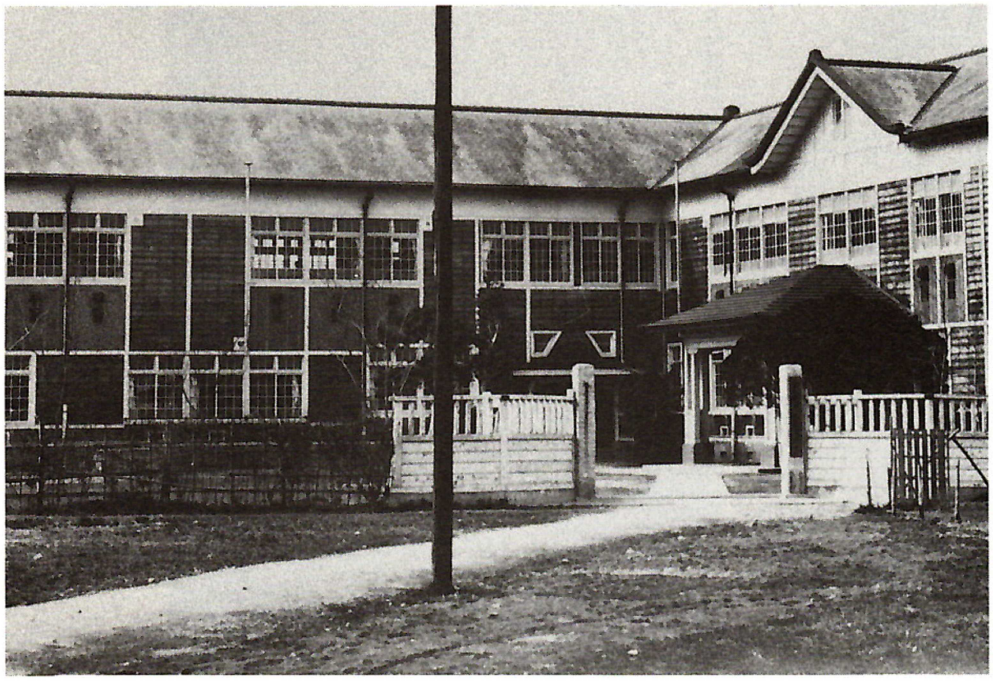
4　岡本かの子の生家（大正七年頃）

現在の大貫病院が、女流文学者岡本かの子の生家である。生家の前には、清流が流れ、幼いかの子の詩情を誘った。写真の屋敷門は、現在はなく、土蔵だけがヒマラヤ杉と共に往時のおもかげをしのばせている。

5　ヨシザキ商店

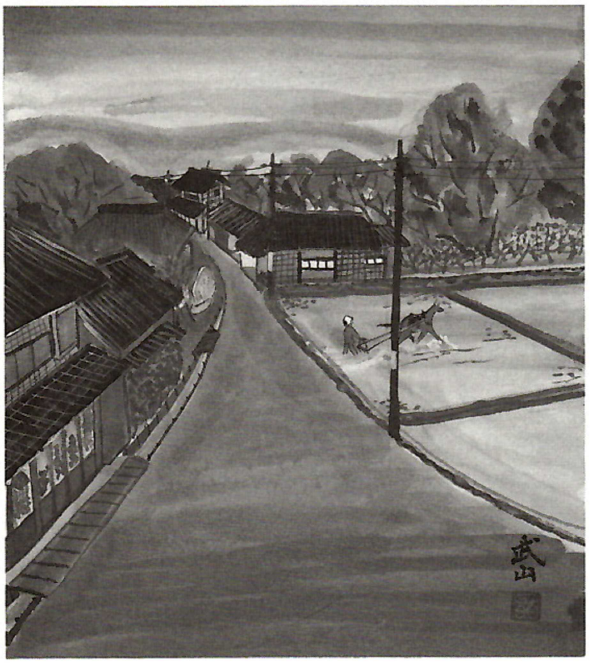
ヨシザキ商店は、二子で最も大きな菓子店で、間口六間程の看板建築の老舗であった。看板建築の特徴は、写真で見るような銅板作りであった。写真は、昭和30年代の二子神社の祭礼で、牛が山車を引いている珍しいスナップである。

6　高津高等女学校



昭和15年頃

7　芭蕉の句碑（明治四十年代）



灰吹屋宝水、すなわち鈴木仁右衛門が建立したもので、初めは、溝口と二子の境の六軒町（武田、西山車屋、田中長全、琴屋、花村藤太郎、大貫蒟蒻店に由来している）の西山車屋の前に建っていた。この土地は、溝口村有地で、今の石井金物店に曲る川口でもあった。そこでは「セイノカミ」が行われたり、夏には大山灯籠を立てる場所になっていた。碑文は「世を旅の、代かく小田のゆきもどり」で、この地を詠んだものではないが、馬絹の一部とここだけが碑文の風情に似かよったことに拠っている。句碑は、西山車屋が明治三十三年に日清戦争記念碑と共に、七面山に移した。現在、この碑は宗隆寺の境内に再び移されている。

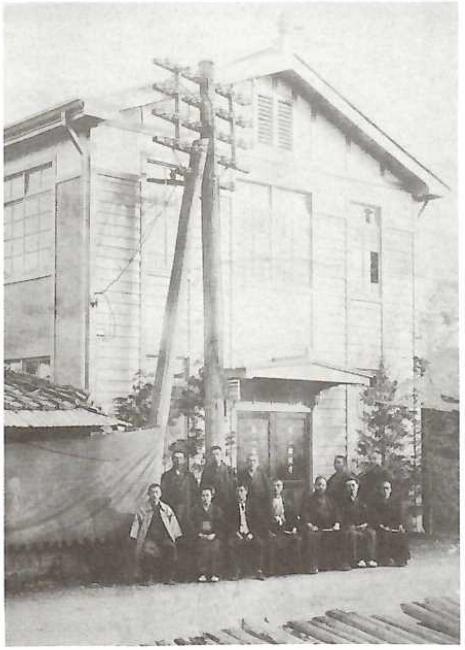
8　大山灯籠

大山灯籠は、大山阿夫利神社の大祭期間中（七月二十七日から、八月十七日まで）決められた場所に毎年立てられた。

最初は、二子の渡しを過ぎて、二子の亀屋前に立てられた。二つ目は、溝口六軒町で、元芭蕉の句碑のあった所、三つ目は、片町の原畳店の前（今の南武線踏切の所）、四つ目は、ねもじり坂上の笹の原地蔵堂の前であった。

木の柱に、木組の火袋を乗せ、上に板の屋根を付けた。火袋には正面に「大山阿夫利神社」と墨書された。この灯籠を囲んで四方に青竹を立て、シメ縄を張り、灯明を灯した。大山詣での旅人は、この灯籠を目当にして、大山詣へと足を進めたことであろう。

9　溝ノ口郵便局



明治５年４月、溝口村元年寄松原庄右衛門が、「溝ノ口郵便取扱所」を開設した。写真は大正元年、初代請負局長森岡重実氏と新局舎提供共同出資者７名の記念写真である。大正13年には、電話交換業務を加えた。

10　農工銀行

当初、町役場の隣にあったがその後溝口十字路に移転し、日本勧業銀行高津支店に変ったが、昭和17年頃に閉店した。写真は、閉店した勧業銀行の建物をそのまま受け継いで開店した川崎信用金庫高津支店の正面である。

11　田中屋鈴木商店

初代は、田中屋清八で、酒・味噌などを商う萬屋だった。三代目清八から、はかりと茶を商った。４代目清左衛門は、東国33ヶ所のはかり販売を一手に引受ける売掛人で、以来150年の歴史を誇る老舗である。写真は、昭和20年代のひとコマである。

12　稲毛乗合馬車

大正の頃、大山道と府中県道に乗合馬車が通っていた。この乗合馬車は、大正二年五月に稲田村中野島の篤志家・古谷善太郎氏等が「稲毛馬車組合」という組合を創立し、乗合馬車営業の許可を受けて始めたものである。稲毛馬車組合の資本金は、三千円と定めて、二十一名の組合員から出資した共同事業であった。業務の執行は、中野島の古谷善太郎、栗谷の井田政太郎、調布町国領の市川寛平氏等三名が行なっていた。

この乗合馬車は三路線からなる。ひとつは、大山道の二子から馬絹・有馬を通り荏田まで、ふたつには、二子から溝口・久地・長尾を通って榎戸まで、いま一つは、溝口の十字路から小杉・平間を通って川崎までであった。馬車の運行回数は、一日に数回であった。

この馬車は一頭立ての四輪車で、屋根にはホロがかかっていた。乗客定数は八人で左右に四人ずつ向かい合って腰掛け、後方から乗り降りした。駆者が「テートーテトテト」と豆腐屋のようなラッパを吹きながら砂利道をガタガタと音をたてて走った。そのため、街道ぞいの人たちは「ガタクリ馬車」と称していた。

馬車の料金は、二子から荏田までの四区間に分かれていた。二子から片町まで十銭、馬絹の川端まで十五銭、有馬まで二十銭、荏田まで二十五銭であった。後に市ケ尾まで延長され、二子から市ケ尾までは三十銭となった。大正十二年頃、荏田の長村氏が二子・荏田間の路線の権利を譲り受け、自動車で運行するようになった。

13　灰吹屋（昭和初期）

昭和11年頃

14　川崎警察署高津分署

大正七年十二月に、洋風建築として建てられた。

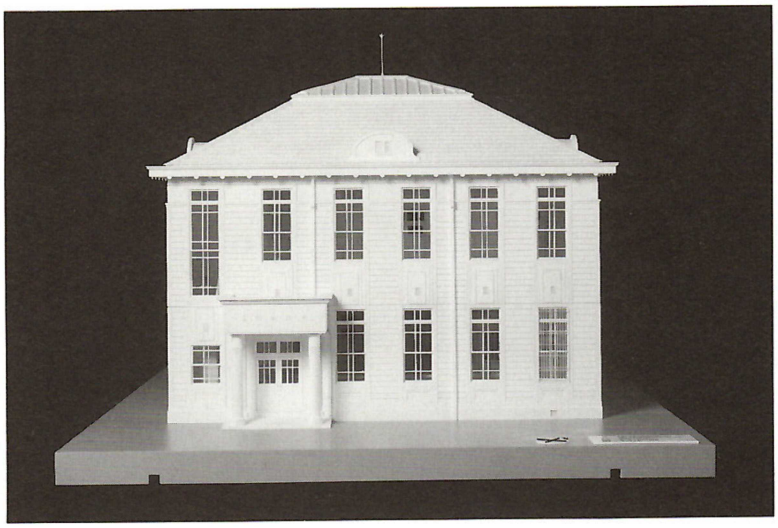
昭和三十年頃、高津警察署が現在地に移転した後は、溝ノ口郵便局として使われ、その後市に移管され、高津土木出張所や溝口駅前再開発事務所となったりしたが、昭和五十四年九月に、取壊された。

大正七、八年頃は、十五～十六名の警察官が勤務していたが、当時は、川崎警察署とこの高津分署のみで、中原署等はなかった。駐在所は、宮内、小杉、千年岩川、馬絹、野川、生田、榎戸、登戸、菅、宿河原などにあった。

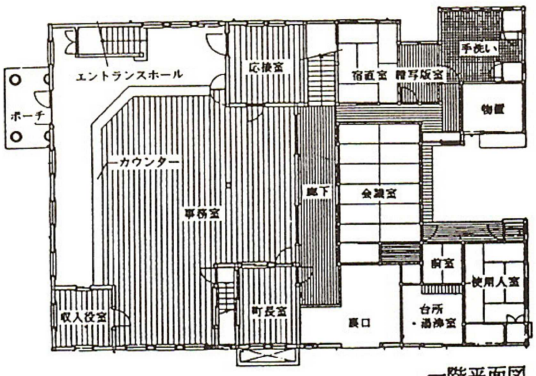
15　旧高津町役場

旧町役場は、溝口六百七十三番地にあった。昭和三年に町制が施かれ、手狭になったので新庁舎を新築する必要が生じた。建物は木造洋風の二階建で、設計は吉野市太郎、施工は大工の川村きのすけと左官の手塚さしちの二人が元請となり、昭和七年に着工、翌八年三月に竣工した。一階が事務室、町長室、会議室を始め、管理人室などを設け、二階は大会議室と小会議室三室があった。

外観は近くの警察署や郵便局と同じように洋風建築であったのでこれらは、街並みの中でもひときわ異彩を放っていた。色彩は警察署と郵便局が青系であったのに対し、役場はクリーム色で、高津町のシンボルであった。現在の「大山街道ふるさと館」の位置にあった。

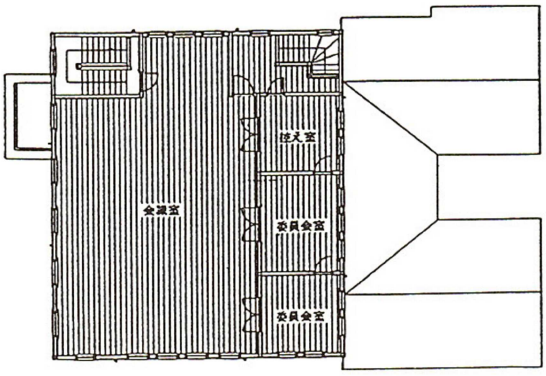


建設当初外観（復元模型）



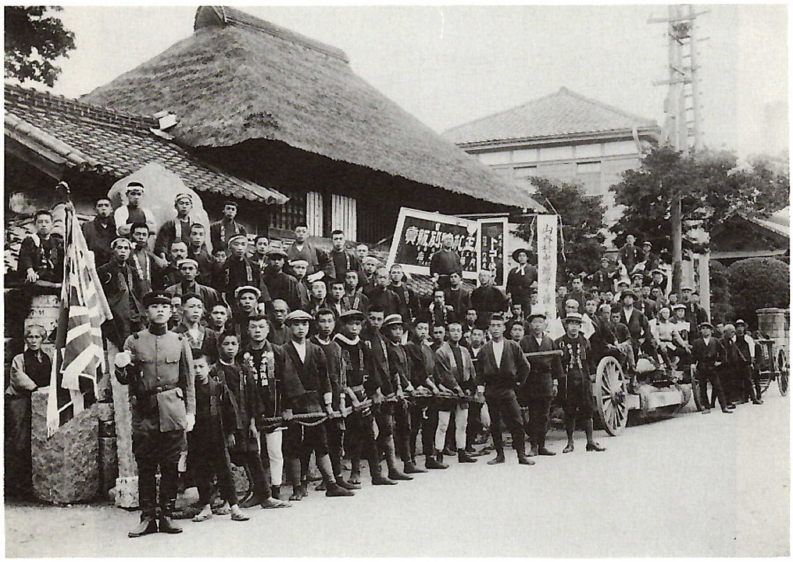
一階平面図

建設当初平面図



二階平面図

16　内藤慶雲石材店



建物は、草葺きで、四十七人もの弟子がいた。石工を育てるのには厳しく、そのエピソードとして、夜弟子が二階の室に上ると梯子を外ずし、窓格子には鉄格子がはめてあり外へ出掛けられないようにしていたという。

慶雲は、徴兵を逃れるために、子供のいない内藤家に夫妻養子に入った。慶雲の号は、井伊大老の墓石を豪徳寺に納めたので、その功績により井伊家から送られたものだ。また、慶雲は、弟子を石工として育てる傍ら、文化事業に熱心で、濱田庄司の陶器や庄司の連れてきた当時は無名の棟方志功の板画の領布会を開いたりした。自身も、俳号を双柿庵と称して、萩原井泉水などの文人の指導者を招いての句会を催ししたりしていた。

17　濱田庄司の生家（大和屋）

第一回人間国宝、文化勲章受賞者、濱田象二（本名）の生家は溝口六七二番地にある。家は、代々和菓子の老舗であり、屋号は大和屋で、現在は「ケーキ大和」である。

父久三の妻は、片町の医師太田資敬の妹であるため、庄司の生れたのは母方の里の太田家であった。病弱であった庄司は、高津第一小学校に学び、絵を愛し、穏やかな田舎の風土を求めて、生涯にわたって大和屋から本籍を離さなかった。今も溝口宗隆寺に永眠している。法名は久成院妙益陶匠日応大居士、行年八十四才だった。

濱田庄司の生家（昭和初期）

濱田庄司の父方の実家が、和菓子舗の大和屋である。庄司が看板に「やまと屋」を「ゐまと屋」と書いたので評判となったエピソードもある。写真左から3番目に庄司の幼年時の姿がある。

18　溝口中宿商店街（大正八年頃）

19　村田茶園

創業は明治元年。初代はコンニャク屋で、今も屋号となっている。屋敷内に広い茶畑があったので茶業を営む一方、「村上」の商標で醤油を醸造して販売していた。戦後は、お茶の販売だけに切り換えて現在に至っている。現村田泰一氏は、10代目の老舗である。

20　池田屋染物店

紺屋の歴史は、四代目太田定からで、約250年経っている。主に農家で使う腹掛け、半纏等を染めた。北海道産の藍で染め、裏庭の蔵の際を流れていた二ヶ領用水で濯ぎ、裏庭で天日に干した。

21　嶋屋呉服店（昭和初期）

関東大震災後の昭和２・３年頃の写真。震災で壊れた部分を修理して、庇の瓦をトタンに改め、看板の中を銅で巻いて庇にのせた。反物が下がっている様に見えるのは、夏のゆかたの大売り出し中のためである。

嶋屋呉服店（大正頃）

大正五年の新築。間口は、六間（一〇メートル）で、看板は、東京白馬堂で作ったもので、金文字を切り抜き、文字は木を切り抜いたものだった。

店には、女中と番頭が十五人も居て大繁盛だった。お客に食事を出して、嫁入り衣装などをゆっくり選んでもらい買上げた品物は、馬力や牛車に積んで客宅に運んでいた。また、問屋には、品物を運んでこさせ、店頭に並らべ売れた物だけの代金を支払い、売れ残った物は残品として返品するほどの高姿勢であった。

22　玉川電車と電灯

明治四十五年に玉川電車が瀬田までくると、それに伴って電力の供給が多摩川を越えた。つまり二子・溝口の全戸と大山道に面した片町・下作延・久本の一部、それに笹ノ原まで電灯がつくようになった。

当時、電灯は貴重なもので、一般の家では五燭光の電球を一灯しか付けられなかった。しかも、その電灯はコードを長くしておいて、必要な部屋へ移動したものである。電球が切れると、それを散宿所へ持って行き、新しい電球と交換してもらった。その頃、電灯を付けるのは大変なことで、溝口の大きな商店でも五灯しか付いていなかった。

嶋屋呉服店（大正頃）

大正五年の新築。間口は、六間（一〇メートル）で、看板は、東京白馬堂で作ったもので、金文字を切り抜き、文字は木を切り抜いたものだった。

店には、女中と番頭が十五人も居て大繁盛だった。お客に食事を出して、嫁入り衣装などをゆっくり選んでもらい買上げた品物は、馬力や牛車に積んで客宅に運んでいた。また、問屋には、品物を運んでこさせ、店頭に並らべ売れた物だけの代金を支払い、売れ残った物は残品として返品するほどの高姿勢であった。

22　玉川電車と電灯

明治四十五年に玉川電車が瀬田までくると、それに伴って電力の供給が多摩川を越えた。つまり二子・溝口の全戸と大山道に面した片町・下作延・久本の一部、それに笹ノ原まで電灯がつくようになった。

当時、電灯は貴重なもので、一般の家では五燭光の電球を一灯しか付けられなかった。しかも、その電灯はコードを長くしておいて、必要な部屋へ移動したものである。電球が切れると、それを散宿所へ持って行き、新しい電球と交換してもらった。その頃、電灯を付けるのは大変なことで、溝口の大きな商店でも五灯しか付いていなかった。

溝口の亀屋（大正十二年頃）

明治三十年二月、文豪・國木田独歩が溝口を訪れ、亀屋という旅人宿に一泊した。そのときの作品が有名な『忘れえぬ人々』である。

その冒頭に「多摩川の二子の渡をわたって少しばかり行くと溝口という宿場がある。その中程に亀屋という旅人宿がある。恰度三月の初めの頃であった云々……」とあり、当時の溝口の光景がよく描かれている。この作品は明治三十一年四月に『國民之友』に発表された。

亀屋は街道に面した草葺き屋根の二階屋で、表には腰高障子のはまった田舎風の旅人宿であった。店先には「旅人宿、亀屋、酒肴めし」と書いた立て看板があり、障子を開けて店の中へ入ると広い土間、上がりはなの板の間には帳場があった。そして、二階が四部屋、下は三部屋ぐらいあり、各部屋には番号がついていて、独歩が泊まった七番の部屋は、二階の真ん中にある八畳間であった。

当時は生糸の輸出が盛んで、養蚕の時期になると上州や信州からマユの仲買人がきて亀屋に泊まり込み、近郷近在のマユを買って歩いた。マユは手車につんで亀屋に運ばれて仕切られ、今度は馬力につまれて上州の方の製糸会社へ運ばれたのである。

亀屋は大正十二年の震災で被害を受けたが、その後立派に改築され、戦前までは割烹旅館を営んでいた。戦時中は池貝鉄工所の女子寮になり、戦後は郵政省簡易保険局の寮になっていた。現在は亀屋会館として結婚式場、日本料理、中国料理等を営んでいる。

25 溝口神社祭礼之図（大正頃）

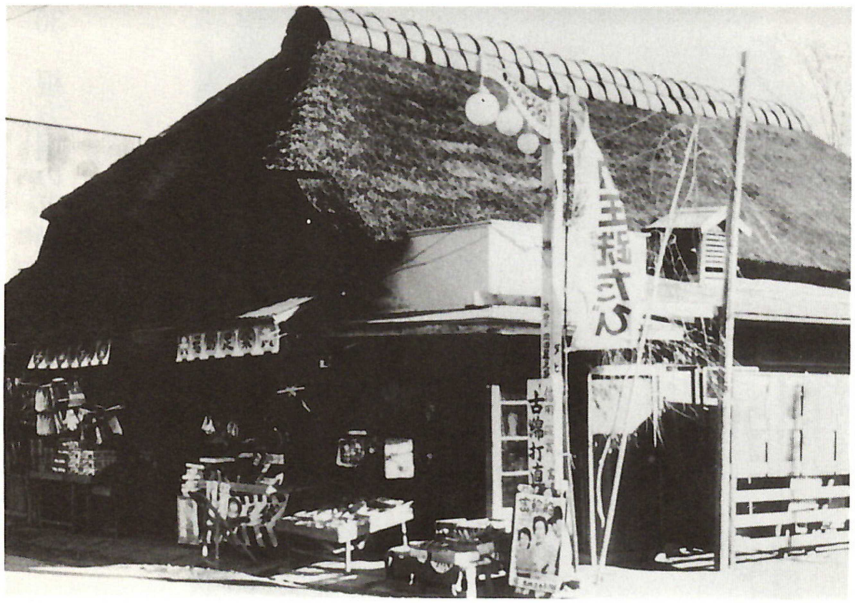
昭和11年

27 溝口神社の御遷宮

当初、高津十字路から初山までシトロエンの乗用車による定期便を運行していたが、その後バス等による交通網が整備されてきたので、自動車部は後退を余儀なくされた。そこで自転車部を新たに独立させて安井自転車店とした。

26 安井自転車店

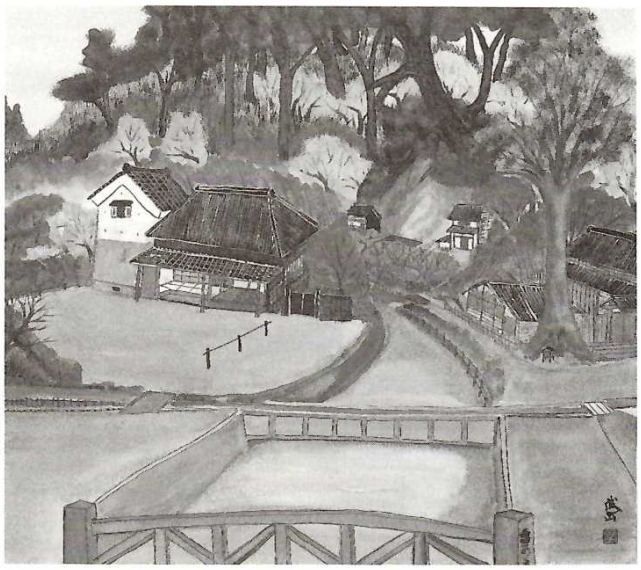
28　岡田屋足袋店



明治から大正の頃が最盛期で、足袋、腹掛け、股引、シャツ等を誂えで作った。特に半纏、足袋は、大工、植木職、鳶職等からの注文で寸法を取って縫い上げた。今でも型紙などが残っている。荏田、石川、稲田、荏原方面からも注文があった。

29　栄橋付近

平瀬川に架かる栄橋は、古くは馬上免橋ともいわれたが、一方ではこの橋が竣工した当時、県知事がこの街が栄えるように栄橋と名付けたといわれ、また、溝口と下作延の境にあったので境橋とも呼ばれていた。この栄橋の上手に平瀬川に樋を掛けた用水堀がある。二ヶ領用水の内の根方堀は久地の円筒分水から分れ、丘陵の麓を流れる堀なのでこう呼んだ。溝口、末長から井田方面までの水田を潤したものだが、現在は水田はなく排水の堀に姿を変えてしまった。昭和三十年代に津田山駅方面からの道路工事により暗渠になってしまい、かっての樋を知る人も少なくなってきた。関東大震災後にコンクリート造りになる前は、松材を使った樋であった。樋の長さは五間（約九メートル）幅が六尺（一・八メートル）で、中央に橋脚を立てている。材料は松丸太で樋の部分だけ角にしてある。板も松材で造ったもので五年目位に掛替えをした。掛替えのための作業場として官地（国有地）が有った。この付近は溝口で一番低く、洪水の度に水害を受けた。昔は宗隆寺手前から徐々に下り、片町の庚申堂のあたりで元の高さに戻った。そのため、平瀬川の河原の様になっていて、現在の丸屋酒店裏側の一角には、岡島と呼ばれた島状の高い土地があり、そこに「岡島」という料理旅館が有った。河原を眺める自然の利があったのであろう。一番低い所では八尺（二・四メートル）位の差があった。平瀬川は、栄橋から入屋橋を通り、坂戸の弁慶島で二ヶ領用水本流（川崎堀）に合流してしまう。



30　根方堀の平瀬川樋（昭和三十年頃）

昭和51年７月

31　平瀬川の洪水

万灯と纏

32　宗隆寺の御会式

33　片町の神奈川道（昭和六年頃）

片町の四ツ角に庚申堂がある。毎年十二月二十八日から二十九日までと、一月二十八日から二十九日までの二回、庚申堂を中心に市が開かれた。「片町の市」「百姓の市」ともいわれ、内田屋から栄橋までの路上を、道が狭いために道の両側に交互に店を出した。この市は、昭和六年頃まで続いていたが、昭和九年頃南武線の武蔵溝ノ口駅南側の新道ができるまでは、幅九尺（約三メートル）の神奈川道を使っていた。十二月十二日と十三日の両日に開かれた影向寺の市に行きそびれた人達は、片町の市を良く利用したという。市では、主として正月用品を売ったが、ざる、神棚のお宮、だるま、熊手、背負いかご、箒、農機具、山の伐採道具（のこぎり、なた）、灯墨（あかりの芯）、苗木等が並べられ、近隣からの客で大盛況だった。

もっとも、江戸時代、この市に限って天下御免の博奕が打たれたので、人気が出たのだという見方もある。

34　二子の渡し

河原道を進むと、川岸に船着場があった。船は川上に向って止っており、客がきて乗り込むと船頭は丸太竿を操って船を川上へ斜めに上り、向う岸に近くなると船を川下へ戻しながら、対岸の船着場へ着けた。これは、川の流れが急なため、横方向に船を漕ぐことが困難なためである。船頭は、前（ヘサキ）に一人、後（トモ）に二人の三人で竿を操るので、三人の息が合わないとうまく船は漕げなかった。この方法は大正十年頃までであった。また、この頃には、川砂利を掘って運ぶ砂利船があった。川下の川崎方面まで下って荷（砂利）を下して川上へ上る時は、船に帆を張り、更に長いロープを付けて川岸を二人で引いて上ってきた。

その後、帆を掛けた砂利船が通らなくなってから、渡し船は、ワイヤーを使い始めた。この方法は、川の両岸に頑丈な支柱を組み、ワイヤーを張り、滑車を通して船のヘサキに結びつけて船が川下へ流されないようにした。船頭は前に一人だけ乗り、竿で船を向う岸に漕ぎ着けた。ワイヤー化で村営となり無料になった。一般に荷馬車が二台、人が十人位ヘサキの方に乗ることができた。また、当時は「霞堤防」で大水が出る度に、村中が川のようになった。今の堤防は、大正三年から八年までかかって造られ、平瀬川の所で左（南）へ曲り川に沿って府中県道まで造られた。その後は、大水が出ても家まで流されるような事はなくなった。橋ができたのは大正十四年七月で、この橋により渡し船は、完全に姿を消した。

35　大石橋

大山道の二ヶ領用水に架かる大石橋は、川の真ん中に橋脚を立って「枕石」をのせ、その上に長さ七尺、幅一尺五寸ぐらいの「渡り石」を五、六枚ぐらいずつ並べて架けてあった。そこから「大石橋」と呼ばれるようになった。雨が降って増水すると、橋脚にゴミがつかえて水がせき止められ、それが滝のように音をたてて落ちるので、近所の人は夜も寝られなかったという。現在の二ヶ領用水は直線になっているが、昔は田んぼに水を引くため、水路は曲がりくねっていた。毎年四月ごろになると、共同で堀にたまった土をさらい出したという。

36　橋場米店

橋場米店は、先代のおじいさんは農業の傍ら屋根葺きの仕事と、そば打ちの仕事もしていた。現在のように米屋になったのは、九代目の現当主・九兵衛氏からで、それは昭和初期のことであった。

当初は地元の地主から年貢米を買ってきて、それを精米して販売していた。その後は東京の神田や深川の米市場まで自転車に乗って米の買付けに行き、トラック一台分の米を買ってきた。このように他の店よりも良い米を安く売った。しかし昭和十七年前後の食糧統制時代に入ると、米は配給制になり、自由に売れなくなった。店の精米機も、供出させられてしまった。米の配給は一人が一日に何合と決まっていて、家族の人数に合わせて配給された。

37　宗隆寺の御会式

現在十月二十一日に行われている宗隆寺御会式は、かっては十一月二十一日に行われていた。前準備から当日までの流れは次のとおりである。

先ず、十七日は、用具の点検を行う。

十八日は、午前一時から餅つきの行事を行う。午前十時頃から出店商人の地割をし、栄橋から大石橋までに約八十軒の露店の場所が決まる。

二十日は、朝から宗隆寺本堂に仕立てた、杉の葉、大根、にんじん等で作った鉢形の塔に三角餅をのせ、上部に紙の花飾をさし込んで仕上げた物を、一対作って供える。

二十一日の当日は、山門前の興林橋の上に「高祖日蓮大菩薩」の大きなのぼり旗を立てる。次に、本堂、祖師堂、水屋等に幕を張り、本堂前の階段には、危険を防ぐための板を張る。この頃から、各講中の万燈を立てる杭打ちの音や、子供のたたく太鼓の音が、響き渡ってくる。午後にお会式の法要が始まる。日暮になると、若衆が太鼓と纏で前景気をつける。七時頃から各寺院の講中が、纏を振りながら、万灯行列を組んで大山道をねり歩き宗隆寺山門に入る。読経を済ませた後、茶めしのおにぎり等を食べてから帰って行く。その頃年番は、商人達に粥を施す。本堂では、午前三時頃まで説教が続く。

二十二日は、朝から後片づけをする。

38　溝口神社の祭礼

溝口神社は、元は赤城社といったが、明治六年の神社の合併により、伊勢宮を主祭神として溝口神社と改め村社の社格を得た。

祭礼は毎年十月十五日で、この日には、勝海舟直筆の大幟が立てられた。長さは十三メートルあり、「一郷咸蒙明神之霊」「萬家奉祝太平和」と書かれている。現在は、天照皇大神が主祭神なので、神明でなければならないが、当時は、赤城明神が主祭神であったので明神の文字が入っている。この大幟を立てるには、四十人の氏子が集って立てたが。現在では、立てる場所がなくなってしまったので昭和十一年の御還宮祭以来立てていないが、正月三ヶ日に限り神社に展示している。また、氏子の各家では、「傘鉾」を立てた。これは溝口独特のもので、杉丸太で枠を組み、提灯を掛け、上に日傘を立てた。傘の、中央部分には紙を貼らずにおく。紙は紫色で、傘の端に長く切ったシメを付ける。傘は、風が吹くと回転するように中程を透かしてある。傘の下に提灯を付ける。巴は掠り巴で、正面からみて、右側が赤色、左側が黒色で、正面に「御神燈」と書く。傘鉾の丸太は、十一尺（三、三メートル）あり、約二尺（六十センチメートル）位埋込んで立てる。この傘鉾の立て始めは、明治二十二年の憲法発布の年で、大通りに面した家だけでなく、氏子の大部分の家がこれを立てた。提灯には、油の灯明を灯した家が多かったが、ローソクを使った家もあった。これを立てる費用が大分掛るので、徐々に少なくなり、今では全く絶えてしまった。

39　高津高等女学校

明治五年に学制頒布により溝口学校ができた。明治二十五年に現在の高津小学校の前身である尋常高等第一高津小学校ができた。その後、青少年教育の必要性と重要性が国内世論となり、高津村においても大正二年に「村立技芸補修学校」が創設されることとなった。学校長は、高津小学校長が兼務し、教員もまた兼務者が多かった。校舎も、小学校に併設されていたが、向丘、宮前、橘、中原、稲田等の各村から多くの生徒が集まった。

授業内容は、子女を賢婦人にするために、行儀作法、裁縫、生花、茶の湯等、家庭科を中心としたものであった。

昭和三年に、高津村に町制が施行されると「高津町立高津実科高等女学校」と校名を改めた。小学校高等科二年卒業生を三年に、一年修了生を二年に、尋常小学校六年卒業生を一年生に編入させて、昭和三年四月にスタートした。この時も小学校の校舎の間借りであった。昭和八年に転々としていた校舎を現在の高津図書館の地に移して、独立の校舎を建設した。三代目までの校長は、小学校長が兼務していたが、独立後の校長として新川正一氏が就任して、初めて本格的な女子教育の園が完成した。昭和十年には組織改正により「高津町立高津高等女学校」と改称し、昭和十二年には、高津町が川崎市に合併されると「川崎市立高津高等女学校」となった。

これが現在の市立高津高校の前身である。

高津郷土史料集（一五）

作成にあたりご協力いただいた方々（敬称略）

相原常二　後藤チヨ
石川稀代之　佐藤愛子
岩堀義郎　島崎信二
上田武一　鈴木かん
上田恒三　鈴木清次
遠藤九兵衛　鈴木敏夫
大久保智子　鈴木英樹
太田清一　鈴木康夫
大貫勇二郎　鈴木容三
大屋泰治　鈴木良栄
岡　信孝　内藤純治
荻島敬蔵　村田泰一
川浪幸枝子　村田友久
菊間八重子　吉崎敏江
木村武一　川崎信用金庫

編集後記

矢倉沢往還（大山道）ここには、時の移り変りによって消滅しつつも、未だ多くの史料を見い出すことができ、また、その保存に人をかきたてるものがあります。

今回もこの街道を取り上げることになりました。前篇ではその対象を、街並を形成していて現存する家としましたが、今回の企画は今はなき街並、すなわち姿、形のない物を対象に調査し、それを記録に残そうというのであります。それは、前回に増してこれに携わる者の労力はもとより、この街道筋におられる方々の理解と協力をいただけなければ、成し得るものではありません。幸いにして多くの方々から、大切にされている貴重な写真等の資料の提供を受けられるとともに、道筋にお住いの古老の方々からは、遠い昔を回顧してその話をお聞かせいただけるなどのご協力を賜わり、ここにこの冊子を刊行することができました。深く感謝を申し上げる次第です。

最後になりましたが、この調査、編集に多くの時間と労力を費やしていただきました、鈴木　穆、新井　清、角田益信、村田文夫の各氏にあらためて、御礼を申し上げます。

（高津図書館長　三浦　浩）

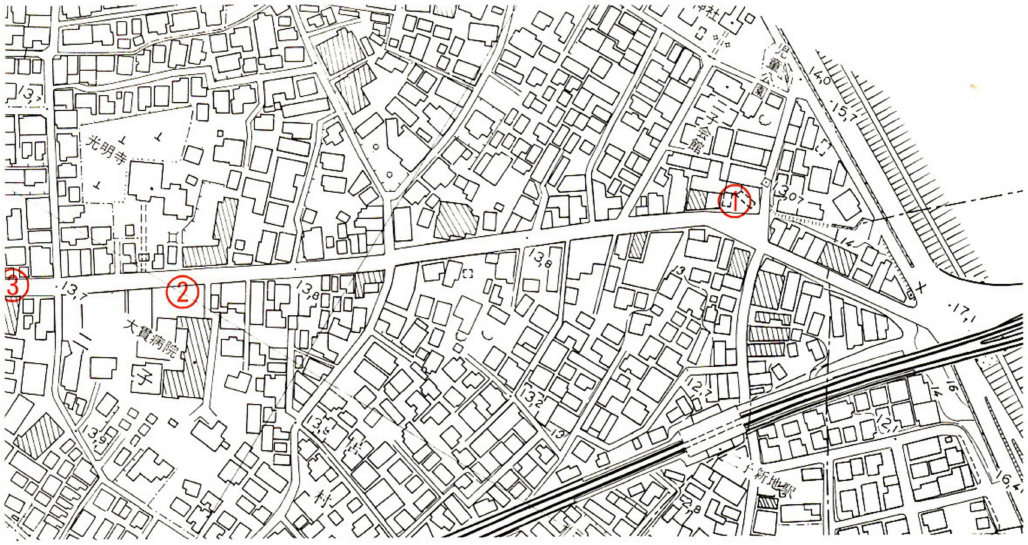
高津郷土史料集　第十五篇

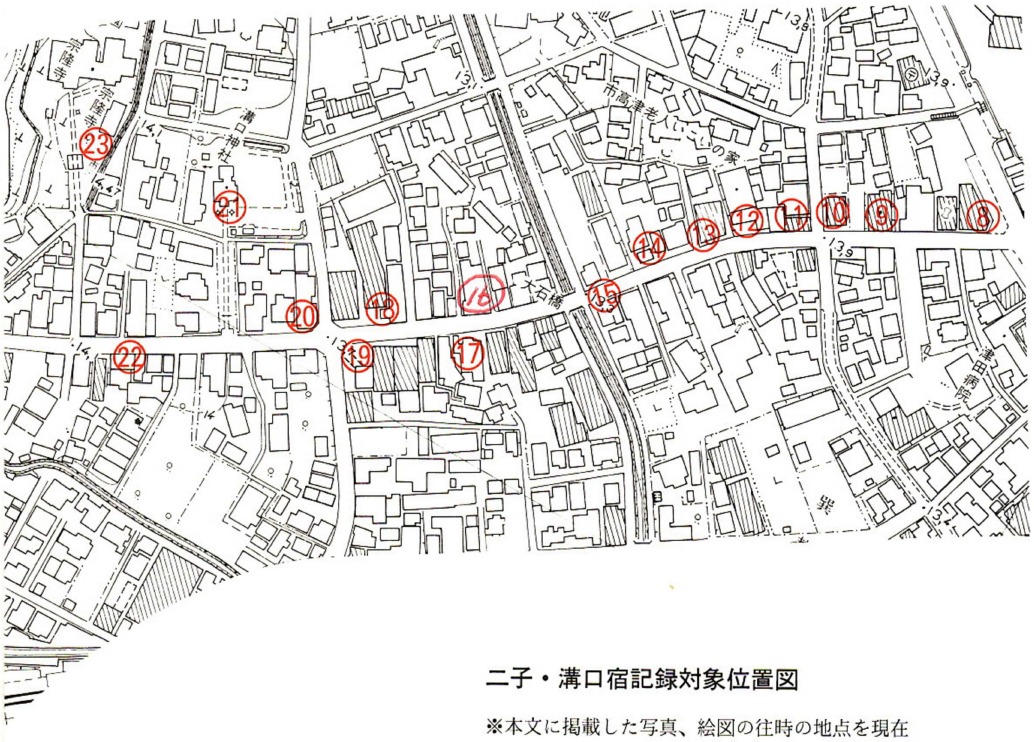
発　行　平成五年三月三十一日

発行者　川崎市立高津図書館
川崎市高津区溝口一、一九三番地
TEL　〇四四（八二二）二四一三

印刷所　文昭堂印刷株式会社
川崎市幸区南幸町三丁目二〇番地
TEL　〇四四（五三三）二一二一

不許復製



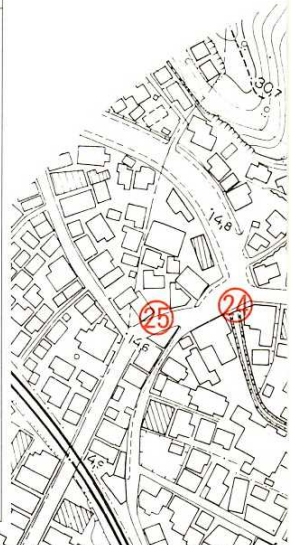


二子・溝口宿記録対象位置図

※本文に掲載した写真、絵図の往時の地点を現在の地図上に示したものである。

※地図上の番号①～㉖は一覧表のとおりであり、又この番号は本文の目次とは別である。

0 50 100 200

地　図　一　覧　表

① 二子の亀屋	⑭ 村田茶園
② 岡本かの子の生家（大貫病院）	⑮ 橋場米店
③ ヨシザキ商店	⑯ 池田屋染物店
④ 芭蕉の句碑	⑰ 高津薬局
⑤ 高津高等女学校	⑱ 溝口の亀屋
⑥ 溝ノ口郵便局	⑲ 嶋屋呉服店
⑦ 農工銀行	⑳ 安井自転車店
⑧ 田中屋鈴木商店	㉑ 溝口神社の祭礼
⑨ 灰吹屋	㉒ 岡田屋足袋店
⑩ 川崎警察署高津分署	㉓ 宗隆寺
⑪ 内藤慶雲石材店	㉔ 栄橋
⑫ 旧高津町役場	㉕ 平瀬川の洪水
⑬ 濱田庄司の生家（大和屋）	㉖ 片町の神奈川道（庚申堂）